

令和 2 年 9 月 8 日現在

機関番号：47501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04396

研究課題名（和文）交代制ルールを中心とした子どもの仲間との関係調整の発達

研究課題名（英文）The development of turn taking rules of children's peer relationship

研究代表者

藤田 文（FUJITA, AYA）

大分県立芸術文化短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：50300489

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、幼児の協力場面における自己と他者の関係調整の年齢差と性差を、交代制ルールの産出を中心に検討することを目的とした。4歳児と5歳児を対象に、ビー玉ゲーム落としゲームの協力場面を設定して、幼児の二人組での実験を行った。その結果、4歳児から5歳児にかけて協力的行動が発達し、女児の方が交代制ルールを用いて公平な仲間関係を調整することが示された。協力が必要な状況の理解がこの時期に発達し、保育場面で協力的行動の促進を行う必要性が示唆され、保育実践に応用可能な意義のある研究結果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果、4歳児から5歳児にかけて協力的行動が発達すること、また交代制ルールを用いた公平な関係調整は女児の発達が早いことが示された。競争条件の設定では、幼児の仲間との関係調整の未熟さを把握できた。従って、保育実践において、協働場面や競争場面を設定することで、協力的行動の発達を促進できる可能性が示唆された。また、その指導には性別を考慮する必要があることも示され、保育実践に応用可能な意義のある研究結果が得られた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to investigate the development of the turn-taking rules of children's peer relationship. The subjects were four years-old children and five years-old children. They were asked to play the game in pairs. And in this game they must cooperate. The results showed that five years-old children cooperated more than four years-old children and girls cooperated using turn-taking rules more than boys. The cooperation skills develop during these preschool children. These results suggested that the cooperation game should be used in the preschool for developing their skills and it is important to consider the sex different for the preschooler's education.

研究分野：発達心理学

キーワード：交代性ルール 幼児期 協同行動

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

同世代の仲間との関係調整の能力は子どもの社会性の発達にとって重要である。幼児期にこの発達がうまくいかないと、青年期の不適応のリスクになることが示されている (Rubinら,1998; Asendorpfら,2008)。従って、現在問題となっている不登校や引きこもりなどの青年期の社会的不適応の予防のためにも、幼児期からの仲間との関係調整の発達を明らかにして、社会性の促進に示唆を与える研究が必要である。

藤本・大坊(2007)のスキルのモデルにおいて、関係調整には三側面あることが示された。筆者の研究(藤田,2007,2015)では、交代制ルールは、遊びに他者を取り込む関係重視の側面、他者と遊具を継続的に共有し遊びを展開する関係維持の側面に重要な役割を果たすことが示された。

しかし、葛藤への対処については交代制ルールとは関連づけてこなかった。そこで本研究では、目的が明確な協力場面において協同や競争条件を設定して研究を行う。協力しなければならない場面では、平等な関係調整のために交代制ルールが必要となり、その発達をより明らかにできると考えられる。

これまでの筆者の研究で、交代制ルールの産出は4歳児から5歳児にかけて、規準が明確化し、他者配慮的なルールの主導ができるように発達することが明らかになった。特に5歳女児で他者を配慮した関係調整の発達が早いことも示された。また、規準が明確な交代制ルールが産出された場合にいざこざが少ないことも明らかになった。つまり、交代制ルールの産出が他者を遊びに取り込み関係調整の足場かけとなっていることが示された。従って、本研究でも引き続き交代制ルールに着目し、その産出を中心に協力場面における関係調整の発達を明らかにする。

### 2. 研究の目的

前述したように筆者の研究(藤田,2007,2015)で、4歳児から5歳児にかけて交代制ルールの産出の年齢差と性差が検討され、遊び場面における仲間との関係調整には、規準が明確な交代制ルールの産出が重要だと示された。

しかしこれらの研究は、ルールを共有すべき明確な目的がない遊び場面に限定されていた。遊び場面では、大きな不平等が生じなければ問題はなく、楽しく遊べればよいという状況である。より協力の目的が明確である場面において交代制ルールを中心とした関係調整がどのように発達するのかは明らかにされていない。従って本研究では、幼児の協力場面における自己と他者の関係調整の年齢差と性差を明らかにすることを目的とする。

従来協同・競争場面における協力行動については、検討されてきた(Madsen,1971,1975;浜崎・石橋,1991,1996;石田,2012)。その結果、都会の子どもたちの方が競争条件で協力行動が減少するという文化差や、競争条件よりも協同条件では協力行動が増加することが示されている。しかし、協力行動の明確な発達は示されておらず、協同・競争場面でお互いの行動の機会を平等にして葛藤を最小限にするための交代制ルールの関係調整における機能は検討されていない。

従って本研究では、協力の目的が明確な場面設定と協同・競争の条件設定を行い、各条件での交代制ルールを中心とした関係調整の年齢差・性差を明らかにすることを第1の目的とする。

具体的にはMadsen(1971)で使用されたビー玉落としゲームを採用した。4歳児と5歳児を同性・同年齢の二人組にして、どちら側の穴にビー玉を落としても成功として報酬が与えられる協同条件と、自分の穴にビー玉を落とした人のみ報酬が与えられる競争条件を設定して、協力行動の成功・失敗、紐の牽引と緩和の交代制ルール、相互交渉過程を検討する。

さらに、研究2年目以降は、大学生も対象に加えて、協力行動の発達の完成形があるのかどうかを検討する。大学生のビー玉落としゲームの行動から、協力行動に関する基礎的データが得られ、子どもに必要な関係調整の在り方や交代制ルールの発展的な調整方法が明らかになることも考えられるからである。幼児で実験する際の、適切な教示や状況の構成などを考えていく必要があるためにも、大学生を対象に実施することが必要となる。従って大学生の協力行動における交代制ルールの産出とそれに関わる社会的スキルを明らかにすることを第2の目的とする。

### 3. 研究の方法

4、5歳児を対象に、同性同年齢の二人組を構成した。保育園・幼稚園の一室で、二人組で一緒にビー玉落としゲームを行ってもらった。

ビー玉落としゲームは、以下の構造である。ゲーム版の両側に子どもが位置して、子どもは紐を持つ。両方の子どもの側にビー玉を落とすための穴がある。中央の木の枠の中にビー玉が入っている。木の枠とひもがつながっている構造である。子どもの一人が紐を引っ張り一人は紐を緩めて、ビー玉を穴に落とすことができれば成功である。しかし、両側の子どもが同時に紐を引っ張ってしまうと、木の枠の中央部分の磁石が外れるようになっており、ビー玉が転がって左右の溝に落ちてしまう。この場合は、失敗となる。

協同条件では、どちらの穴に入っても両方の子どもに報酬(シールのご褒美)が与えられる。競争条件では、自分の方の穴に入った子どものみ報酬(シールのご褒美)が与えられる条件である。各ペアは協同条件と競争条件を10試行ずつ実施した。条件の順序は半数ペアごとにカウンターバランスされた。

29年度と元年度にこのようなビー玉落としゲームの実験を行った。29年度の結果を踏まえて、元年度は練習回数を増やし、教示を改善して行った。

30年度は、大学生を対象として、同様のビー玉落としゲームの実験を行った。手順は同様であった。大学生の場合は、ゲーム実施後に、社会的スキルに関する質問紙も実施した。

さらに、元年度は大学生に対して課題の難易度が高い紙コップ積み立て課題を用いた協力行動の実験を実施した。二人組で紐のついた輪ゴムを引っ張り、紙コップを積み立てていく課題であった。課題終了後、社会的スキルの質問紙を実施した。

#### 4. 研究成果

29年度には、ビー玉落としゲームの協力場面を設定して、幼児の二人組の実験を行った。29年度から30年度にかけて、幼児の行動や会話内容を、詳細にビデオで分析した。その結果、男児の方が女児よりも協力成功得点が高かったが、年齢差は見られなかった。特に女児はひもを二人が同時に引いてしまい、交代制ルールへの産出が非常に少なかった。このゲームの場合は、同時にひもを引いてしまうと協力にならない。この課題構造の理解が不十分であると、女児は同時行動をとってしまうと考えられる。このことから、幼児はゲームの課題構造の理解と関係調整の必要性の理解が未熟である可能性が示唆された。

従って元年度は、ひもを引く行為に加えて押す行為を教示に加え、幼児の理解度を高める改善した。練習回数も増やして実験を行った。また、ビー玉の枠が外れない設定を追加して、同時に引っ張ると相手の力を感じ、関係調整の必要性を理解できるように改善した。

その結果、4歳児よりも5歳児が、男児よりも女児の方が、協力成功得点が高いことが示された。また、女児の方が多く交代制ルールを使用し、公平な関係調整をしていることが示された。さらに、枠が外れない条件では、4歳男児は競争条件で交代制ルールを使用できず、強引に自分の方に引いて葛藤が生じることが示された。女児は、課題構造の理解ができれば、他者を配慮した関係調整ができることが示された。

以上のことから、4歳児から5歳児にかけて協力行動が発達し、特に女児の方が交代制ルールを用いて公平な仲間関係を調整することが示された。4歳児は競争条件で利己的で強引な行動をとり、関係調整が難しいことが明らかになった。従来の遊び場面における交代制ルールの発達と同様、女児の仲間との関係調整の発達の早さが示された点で、従来の研究を支持する結果が得られたといえる。また、同じ協力場面の課題であっても、教示の仕方によって、幼児の理解度が改善され、協力行動を促進することも示された。保育場面においても、協力については理解させることが難しいが、行動に関する教示が重要であることが示唆される。

また大学生を対象に、幼児と同様にビー玉ゲーム課題を実施した。その結果、大学生ではすべてのペアで交代制ルールが産出された。従って、平等性を重視する交代制ルールの産出が発達の最終形態であることが示唆された。しかし、交代制ルールを産出したペアとそうでないペアや提案した人としなかった人の社会的スキル得点を比較したが、その違いを見出すことはできなかった。

さらに元年度は、交代制ルールの完成形を示すために、大学生を対象にビー玉課題よりも難易度の高い協力課題である紙コップ積み立て課題の実験を実施した。分析の結果、協力行動の成否に直接関わらない交代制ルールはほとんど産出されないこと、容易な課題の場合は二人の公平性を保つための交代制ルールが産出される場合もあるが、困難な課題では産出されないことが示された。大学生を対象としたが、協力や交代制ルールの産出と関連した個人のスキルは特定できなかった。

これらの大学生を対象とした実験から、交代制ルールの産出は、協力場面における関係調整に当然のように産出されるルールであることが示された。しかし、大学生になると、協力行動の成否や課題に応じた関係調整が行われ、必ずしも常に交代制ルールが産出されるとは限らないことも示された。また、交代制ルールの産出や協力行動と関連する社会的スキルを特定することはできなかった。この点は、今後の課題である。大学生の実験から、幼児の場合も課題状況に合わせた関係調整のスキルを発達させることが必要だと示唆される。

以上の結果をまとめると、4歳児から5歳児にかけて協力行動が発達すること、また交代制ルールを用いた公平な関係調整は女児の発達が早いことが示された。競争条件の設定では、幼児の仲間との関係調整の未熟さを把握できた。従って、保育実践において、協同場面や競争場面を設定することで、協力行動の発達を促進できる可能性が示唆された。また、その指導には性別を考慮する必要があることも示され、保育実践に応用可能な意義のある研究結果が得られた。

#### 引用文献

Asendorpf, J.B. & Denissen, J.J. & Aken, M.A.G. (2008). Inhibited and aggressive preschool children at 23 years of age: personality and social transitions into adulthood. *Developmental Psychology*, 44, 4, 997-1011.

藤本学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーションスキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, 15, 3, 347-361.

藤田 文(2007). 魚釣りゲーム場面における幼児の交互交代行動 - 交互交代の規

準と主導者に着目して - 発達心理学研究,18, 227-235.

藤田 文(2015). 遊び場面における幼児の仲間との関係調整の発達：交代制ルールの産出とその主導者を中心に 風間書房

浜崎 隆司・石橋 尚子(1991). 幼児の協同行動における実験的研究 広島大学教育学部紀要,39,255-260.

浜崎 隆司・石橋 尚子(1996). 幼児の協同行動におよぼす遊び形態と物質的報酬の影響 幼年教育研究年報,18,63-69.

石田 開.(2012). 幼児の有限資源事態における競争 / 協同行動：他者理解能力との関連 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要,44,85-94.

Madsen,M.C.(1971). Developmental and Cross-Cultural Difference in the Cooperative and Competitive Behavior of Young Children. *Journal of Cross-Cultural Psychology*,2,365-371.

Madsen,M.C. & Yi,S. (1975). Cooperation and competition of urban and rural children in the Republic of South Korea. *International Journal of Psychology*,10,269-274.

Rubin,K.H. (1990). Introduction ; Special Topic: Peer relationships and social skills in childhood-An interactional perspective, *Human development*,33,221-224.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 藤田 文	4. 巻 57
2. 論文標題 大学生の協同課題における交代制ルール	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大分県立芸術文化短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 85-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤田 文	4. 巻 55
2. 論文標題 短期大学の多人数授業への協同授業の適用 個人の貢献度とコミュニケーションスキルの関連を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大分県立芸術文化短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤田 文	4. 巻 56
2. 論文標題 幼児の協同行動における交代制ルール	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大分県立芸術文化短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 177-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤田 文	4. 巻 55
2. 論文標題 児童期の遊びにおけるルールの産出	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大分県立芸術文化短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 短期大学の多人数授業への協同授業の適用（2）
3. 学会等名 日本協同教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 協同ゲームにおける交代制ルールの産出（2） - 紙コップ積み立て課題を用いて -
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 幼児のゲーム遊び場面におけるルール崩壊過程の性差
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 大学生のコミュニケーションスキルと協同授業貢献度の関連
3. 学会等名 日本協同教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 協同ゲームにおける交代制ルールの産出(2) - 紙コップ積み立て課題を用いて -
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 短期大学の多人数授業への協同授業の適用(2) - 交代制ルール意識とディスカッションスキルを中心に -
3. 学会等名 日本協同教育学会第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 協同ゲームにおける交代制ルールの産出
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 短期大学の多人数授業への協同授業の適用 - 個人の貢献度と交代制意識の関連を中心に -
3. 学会等名 日本協同教育学会第15回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 子どもの遊び場面におけるルールの産出
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 幼児の協同行動に及ぼす報酬の効果
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 藤田文	4. 発行年 2017年
2. 出版社 サイエンス社	5. 総ページ数 253
3. 書名 発達と老いの心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----